

< 虫たちの冬の家 >

桑原紀子

12月が近づいたので、庭の木々の剪定をしました。大きく伐った枝は束ね、細い枝はチップにして庭に敷き詰めます。そうすると、少しずつ土になっていくのです。

日向ぼっこをしながら息子とその作業をしていると、虫たちの作った不思議な造形物がいくつか見つかりました。あまりにも小さかったり、上手にカムフラージュしていたりで、立ち木の枝にある時は気がつかないのです。



キボシトックリバチの巣



ミノムシの巣

以前は冬になると柿の木でよく見つけたのに、珍しくなっていました。刺されると痛いイラガの幼虫が作った1、3cm程の小さい繭です。とても固く、白地に



イラガの繭



カマキリの卵

に焦げ茶の縞模様が、焼き物のつぼか小鳥の卵のようです。幼虫はこの中で冬を越し、来年5月頃羽化します。繭の縞模様はひとつずつ異なっていて、その秘密は「イラガのマユのなぞ」(偕成社)という一冊の本にまでなっ

ています。

< もみじにぶら下がるミノムシ >

ミノムシも久しぶりでした。これはオオミノガの幼虫の冬の巣です。枝にしっかり固定しています。ミノムシが少なくなったと感じていたら、なんと西日本の方では、絶滅危惧種に指定されているそうで、びっくりしました。1995年頃から、それまで日本にいなかったオオミノガドリバエという寄生バエが日本に侵入し、集中的に寄生して、ほとんど全滅とのこと。どこにでもいたミノムシにも大変な事が起きているようです。

< 金木犀の泡の巣 >

オオカマキリの泡のようなスポンジ状の巣で、沢山の卵を冬の寒さから守ります。ある絵本によると、ここから162匹の赤ちゃんが生まれたそうです。

虫たちはそれぞれ工夫をこらして機能的な家を作り、きびしい冬を生き延びます。住宅地の小さな庭の中にも、こんな楽しい職人技がそっと隠れているのです。

< もみじの枝の小さなつぼ >